ボーエン病と内臓悪性腫瘍

胃癌を合併したボーエン病の4例

米田 和史^{*1} 長谷川核三^{*1} 野田 徳朗^{*1}
森 俊二^{*1} 山本 明史^{*2} 鈴木 雅雄^{*3}

Summary

Four cases of Bowen's disease associated with early gastric cancer were reported.

Case 1. A 60-year old man visited our department in June, 1985, with a 17×19mm sized erythema on the penis. Bowen's disease was histologically diagnosed. Soft X-ray therapy cured the lesion. Examination of internal organs demonstrated lung cancer in February, 1986. A combination of chemotherapy and radiation exerted a complete remission. In December, 1987, X-ray examination of upper gastro-intestinal tract revealed multiple early gastric cancer (IIa+IIc, IIa, IIc, IIc). The patient underwent surgery.

Case 2. A 79-year old man visited in September, 1987 with pigmented macules on the waist, abdomen and left axilla, sized 59×75mm, 20×18mm and 21×31mm respectively. Bowen's disease was histologically diagnosed for the waist lesion and basal cell carcinoma were diagnosed for the others. Examination of internal organs revealed multiple early gastric cancer (I+IIa, IIc+IIa) in October, 1987. One month after the gastrectomy, the skin lesions were removed in December, 1987.

Case 3. A 65-year old man visited in October, 1990 with a 10×15mm sized ulcer on the left index. The lesion was histologically diagnosed as Bowen's disease. The lesion was totally removed. Examination of internal organs showed an early gastric cancer (IIc) in January, 1991. So that gastrectomy was carried out.

Case 4. A 73-year old man visited in January, 1991 with a 30×34mm sized pigmented macule on the left arm. The lesion was histologically diagnosed as Bowen's disease and totally removed. Examination of internal organs disclosed an early gastric cancer (IIa) in January, 1991. The patient refused our proposal of surgical operation.

From January, 1985 to December, 1992, 43 patients with Bowen's disease visited our hospital. Sixteen patients of them were examined for the malignancy of internal organs. Eight patients (50%) of them were associated with malignant tumor, including 6 patients (37.5%) with internal malignancy. This study includes 3 patient who would have been killed by the tumor, if the internal examination were not suggested by their Bowen's disease. This result suggest the importance of internal examination in the patients with Bowen's disease.

^{*1} Kazufumi YONEDA, Kakuzou HASEGAWA, Tokuro NODA, Shunji MORI : 岐阜大学皮膚科学教室

^{*2} Akifumi YAMAMOTO : 大垣市民病院皮膚科

^{*3} Masao SUZUKI : 岐阜大学放射線科学教室

緒 言

Graham と Helwig¹⁾がボーエン病と内臓悪性腫瘍の合併を報告して以来、両疾患の関係が注目されている。今回、我々は早期胃癌を伴ったボーエン病を4例経験したので報告する。

症 例

症例1：60歳，男性

初 診：昭和60年6月13日

主 訴：亀頭部の紅斑。

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：昭和18年に肺結核。

現病歴：初診の約1ヵ月前に亀頭部のびらんを伴った紅斑に気付き、次第に拡大してきたため来院。

現 症：亀頭部にびらんを伴った17×19mmの不整形の紅斑を認め、一部に色素沈着を伴っていた（図1）。

図1．症例1の初診時臨床像

一般臨床検査成績：特記すべき異常所見なし。

病理組織所見（図2）：粘膜上皮は著明な肥厚を認め、棍棒状に延長。腫瘍細胞には大小不同、配列の乱れ、個角化および多数の核分裂像を認め、ボーエン病と診断。

治療および経過：治療として同年7月よりデ

図2．症例1の病理組織像（H.E.染色）

ルモパンによる軟X線治療を行い、皮疹は消失、その後の全身検索にて、昭和61年2月に肺癌を認めた。化学療法および放射線療法にて肺癌は消退した。また、62年12月にIIa+IIc, IIa, IIcおよびIIcの多発性早期胃癌を認め、平成1年6月に手術を行った。その後再発は認めていない。

症例2：79歳，男性

初 診：昭和62年9月9日

主 訴：軀幹に多発する色素斑。

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：サルバルサン治療歴あり。

現病歴：初診の約3ヵ月前、左腰部、腹部および左腋窩部の色素斑に気付き、徐々に拡大してきたため来院。

現 症：腰部に大きさ59×75mmの赤みを伴った色素斑を認め、辺縁部には一部黒褐色の痂皮を付着していた（図3）。腹部には20×18mmのやや隆起した紅褐色斑を認め、一部痂皮を付着していた。また、左腋窩部には21×31mmの黒色調の隆起を伴った色素斑を認めた。

一般臨床検査成績：特記すべき異常所見なし。

病理組織所見（図4）：左腰部の生検組織では表皮は不規則な表皮肥厚を認め、真皮上層には細胞浸潤を認めた。構成細胞は大小不同が著しく、配列の乱れ、個角化を認め、ボーエン病と診断した。腹部および左腋窩の皮疹の生検組織はともに真皮内に大小の好塩基性細胞よりなる

図 3 . 症例 2 の初診時臨床像

図 4 . 症例 2 の病理組織像 (H.E. 染色)

図 5 . 症例 2 の胃手術標本

腫瘍巣を認め、蜂巣辺縁の細胞は柵状配列を示し、基底細胞上皮腫と診断した。

治療および経過：その後の内臓検索で同年10月に早期胃癌 I + IIa と IIc + IIa を認めたため、11月胃亜全摘を行った(図 5)。その後12月にボーエン病および基底細胞癌の手術を行い現在再発を認めていない。

症例 3：65歳，男性

初 診：平成 2 年10月15日

主 訴：左手手指の潰瘍。

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：昭和39年肺結核。

現病歴：初診の 7 年前左示指の疣状の小結節に気付き、時々角化物がはがれ、潰瘍を生じた。2 年前から拡大傾向を認め近医を受診、当科を紹介された。

現 症：左示指に基部の中指側面に10×15 mm の潰瘍を伴った紅斑を認め、黄色調の痂皮を付着していた (図 6)。

図 6 . 症例 3 の初診時臨床像

一般臨床検査成績：特記すべき異常所見なし。

病理組織所見 (図 7)：生検組織像では過角化、表皮肥厚を認め、真皮上層には密な細胞浸潤を認めた。表皮を構成する細胞は大小不同、核異型、配列の乱れを認め、ボーエン病と診断した。

治療および経過：同年12月にボーエン病の全摘出術を行った。全身検索にて II c の早期胃癌を認めたため、平成 3 年 2 月に胃の亜全摘を行った。組織は印環細胞癌の像であった。その後現在まで再発は認めていない。

図 7. 症例 3 の病理組織像 (H.E. 染色)

症例 4 : 73 歳, 男性

初 診 : 平成 3 年 1 月 7 日

主 訴 : 左手関節部の色素斑。

家族歴 : 特記すべきことなし。

既往歴 : 63 歳時脳卒中。

現病歴 : 初診 4 ヶ月前左手関節背面の紅色色素斑および左耳前部の紅斑を伴った色素斑に気付き, 近医で外用剤による治療を受けたが, 治癒しないため来院。

現 症 : 右手関節背面にはほぼ楕円形の 30×34 mm の紅褐色斑を認めた (図 8)。

図 8. 症例 4 の初診時臨床像

一般臨床検査成績 : 特記すべき異常所見なし。

病理組織所見 (図 9) : 手術標本の組織像は, 表皮の不規則な肥厚, 真皮の浸潤細胞を認めた。表皮を構成する細胞は大小不同, 個角化, 配列の乱れおよび核異型を認め, ボーエン病と診断した。

図 9. 症例 4 の病理組織像 (H.E. 染色)

治療および経過 : 平成 3 年 1 月にボーエン病の全摘出術を行い, その後の内臓検索にて IIa の早期胃癌を認めた。そのため手術を勧めたが拒否され, その後來院していない。

考 按

1985 年から現在までの 8 年間に 4 例の早期胃癌を合併したボーエン病を経験した。この間に我々が経験したボーエン病は 43 症例あり, またこの内, 内臓悪性腫瘍の検索が積極的に行われたものは 16 症例である。表 1 にそのまとめを示した。これらの 16 症例のボーエン病の内 8 症例 (50%) に悪性腫瘍の合併を認め, また皮膚以外の悪性腫瘍の合併は 6 例 (37.5%) に認められた。悪性腫瘍の合併の内, 最も多かったのは早期胃癌の 4 症例 (25%) であり, この内症例 1 はさらに肺癌を, 症例 2 は多発基底細胞癌を合併していた。その他大腸癌の合併および脳腫瘍の合併が各 1 症例であった。また, 有棘細胞癌の合併が 2 症例あり, この内 1 症例は疣贅状表皮発育異常症に伴ったものであった。佐川ら²⁾はボーエン病に合併する内臓悪性腫瘍として子宮癌 (27.3%), 胃癌 (26.3%) および肺癌 (17.9%) が多いと報告している。我々の症例では子宮癌の合併は認められていなかったが, これは検索したボーエン病患者の内に女性が少なかったことが関係していると考えられる。一方, 内臓悪性腫瘍の検索が行われなかった残りの 27

表1. 内臓悪性腫瘍検索の行われたボーエン病の16症例

症例	年齢	性	部位	病巣数	合併症
1	60	男	亀頭	1	胃癌 (IIa+IIc, IIa, IIc, IIc)、肺癌
2	79	男	腰部	1	胃癌 (I+IIa, IIc+IIa)、多発基底細胞癌
3	65	男	左示指	1	胃癌 (IIc)
4	73	男	右手関節	1	胃癌 (IIa)
5	80	男	右大腿	1	
6	58	男	左右足背	2	大腸癌
7	66	女	腰部	1	
8	63	男	右大腿	1	脳腫瘍
9	67	男	左右大腿	2	
10	68	男	背部	1	
11	88	男	右示指	1	有棘細胞癌 (頭)
12	72	女	頭	1	
13	84	男	下肢	1	
14	76	男	左手背	1	
15	76	女	右側腹	1	
16	61	男	前胸部	2	有棘細胞癌 (顔)、疣贅状表皮發育異常症

症例の内では1症例 (3.7%) のみに基底細胞癌の合併が認められ、内臓検索を行われなかった症例での合併率と著しい差が認められた。全症例を合わせると43症例中9症例 (20.9%) に悪性腫瘍の合併を認め、6症例 (14.0%) に皮膚以外の悪性腫瘍の合併を認めた。

ボーエン病の内臓悪性腫瘍合併についてはGrahamらの報告¹⁾以来多数の報告があり (表2)³⁾⁴⁾、その合併率は報告者によって0%から68.6%とまちまちである。報告者の中にはボーエン病と内臓悪性腫瘍の合併は単なる重複癌にすぎず、ボーエン病は内臓悪性腫瘍のマーカーとなり得ないとの考えもある。今回の我々の症例については、コントロールスタディーを行ったわけではないので、ボーエン病の内臓悪性腫瘍合併が有意に高率であるかどうかは明確ではない。しかし、内臓検索を行った症例群で非常に高率に内臓悪性腫瘍を発見することができ、その内の4症例は治癒可能な早期胃癌であり、この内の3症例は早期に十分な治療を施すことができた。もしも内臓検索を行っていなければ、あるいは3人のボーエン病患者も手遅れになっていた可能性が高く、ボーエン病において内臓悪性腫瘍の検索を行うことは非常に有意義と考え、その重要性を再確認した。

表2. ボーエン病と内臓悪性腫瘍の合併に関する報告

報告者	年度	総数(人)	癌合併(人)	合併率(%)
1 Graham et al.	1959	35	24	68.6
2 上野	1968	170	6	3.5
3 小林ら	1969	172	8	4.7
4 北村ら	1971	12	1	8.3
5 越智ら	1984	63	6	20.6
6 池田ら	1985	638	46	7.2
7 竹田ら	1986	41	6	14.6
8 桜井ら	1988	42	6	14.3
9 佐川ら	1988	39	3	7.7
10 清原ら	1988	126	20	15.9
11 前田ら	1988	15	3	20.0
12 伴田ら	1989	19	1	5.3
13 山本ら	1990	41	0	0.0
14 八木ら	1990	85	20	23.0
15 大久保ら	1990	29	4	13.8

文 献

- 1) Graham, J.H., Helwig, E.B.: Bowen's Disease and Its Relationship to Systemic Cancer. Arch. Dermatol., 80: 133-159, 1959.
- 2) 佐川曜子, 五味俊彦, 田村啓彦, 他: 内臓悪性腫瘍を伴った Bowen 病の3例—当教室の10年間の統計を加えて—。皮膚臨床, 33: 279-283, 1991.
- 3) 上野賢一, 横山文男, 儀保元雄: Bowen 病と悪性腫瘍の合併について, 皮膚臨床, 10: 392-399, 1968.
- 4) 清原祥夫, 早坂健一, 石原和之: ボーエン病, とくに多発症例と重複癌. Skin Cancer, 3: 267-272, 1988.